

バドミントン部

一瀬 正治

60年の歩み

バドミントン部は、昭和24年に同好会として創立されたのに始まる。当時は、旧制の最後、いわゆる千葉医大の頃であった。当初は、屋内に専用の練習場はなく、バスケットコートで行っていた。昭和25年になって、現在、大学病院の立体駐車場となっている場所にあった大学会館内の講堂に、卓球部と隔日交代で、コート2面をやっと確保して活動していた。夏には合宿も行い千葉バドミントン協会にも加盟した。秋には国体の県予選を突破して、福島、中神、入枝、鈴木の名氏が県代表として名古屋での国体出場を果たしている。

昭和26年の春には、部に昇格し、病理学の石橋教授に部長をお願いし、また秋山氏が監督として新たな出発をした。昭和24年5月には、新制千葉大学となったが、旧制の最後の学生達（秋山、鈴木、中神、福島元之、福島通夫氏）と新制千葉大学となつてからの学生達（三橋、堀越、立岩、仙波、竹内、谷川、瀬田、中林、桧垣氏ら）が、他の大学からコーチを招き猛練習を積んで関東学生リーグの三部に参加した。その結果、優勝を果たし、二部に昇格

している。以後数年間は二部の3-4位を維持していた。また昭和26年頃からは、東大、一橋大、金沢大と定期戦を行い、地元的高等学校（千葉二高、木更津一、二高、長生二高）へはコーチとして出向くかたわら練習試合も行うなど、活発に活動していた。昭和29年には、関東甲信越国立大学体育会で団体戦3位、個人戦2位という成績を収めた。

昭和30年には整形外科学の鈴木次郎教授に部長をお願いし、昭和32年からは立岩氏が監督に就任。昭和31年頃から、他の学部の学生達も入部して医学部主導で歩んできた部も他学部の優秀な選手が育つにつれ、次第に活動の中心は他学部学生へと移っていくことになる。

東日本医科学学生体育大会へは第1回大会（昭和33年）から参加し、第5回大会（昭和37年）まで男子団体戦5連覇を果たすなど、めざましい成績を残している（村田、小林總介、小崎、中村、宮治誠、井上信、坂田、根岸、竹内明美、岡野照美、久満、信川ルミ、高野、小林伸行、石田、小野道子、小松忍、大沼、本多氏ら）。第6回大会以降も東日本医科学学生体育大会へは、医学部部員がチームを編成して参加していたが、札幌医大、新潟大学などに強力



昭和37年～昭和48年卒のOB



2010年 東医体

な選手が現れ、以前のような成績はあげられなかった（土田、中島、一瀬、渡辺、梅沢悦子、山岸厚子氏ら）。昭和43年1月に鈴木次郎教授が急逝され、その後、肺癌研究施設の香月秀雄教授に部長をお願いした。昭和45年頃には医学部部員は、4名にまで減少したにもかかわらず、彼らの頑張りでも東日本医科学学生体育大会団体戦において3位の成績を残して

いる（牧野、旭、大橋、松前氏ら）。しかし、活動拠点が西千葉の体育館に移ったこともあり、その後、医学部部員は、一人もいなくなってしまい東日本医科学学生体育大会で輝かしい成績を残してきた医学部学生の千葉大学バドミントン部は一旦、終止符を打つこととなった。

昭和49年になり再び医学部学生によりバドミントン部が作られることになり、第三解剖学の大谷教授に顧問教官をお願いし活動を開始した。部員は次第にふえて、再び東日本医科学学生体育大会、秋期関東医科学学生リーグにも出場できるようになった。次第に医学部のみならず看護学校、看護学部の学生も共に活動するようになり亥鼻キャンパスのクラブとして現在では医学部看護学部バドミントン部となった。大谷教授退官後は、顧問教官は、微生物学の清水文七教授、形成外科学の一瀬へと引き継がれた。平成20年4月からは耳鼻咽喉科学の岡本美孝教授に顧問教官をお願いして現在に至っている。現在、部員数は60名に達し、平成20年度後期は、団体戦のみの「関東秋リーグ」で、男女ともレギュラー優勝、さらに入れ替え戦でも勝利し、男子は三部へ、女子は一部に昇格した。また、個人戦のみの「新人戦」では、男子一部シングルス・ダブルス、女子一・二部シングルス・ダブルスでも優勝を飾っている。

（いちのせ まさはる）



2010年 追いコン